

外国語学部新規開講科目「e-ラーニング応用」 における CALL 実践

阿佐宏一郎*・与那覇信恵*

[キーワード] CALL、e-learning、TOEIC、三ラウンド・システム

[要旨] 文京学院大学本郷キャンパスでは2012年度にCALL教室が刷新され、それを活用する1つの具体的実践方法として、CALLを使った英語選択科目「e-ラーニング応用 a, b」が外国語学部・短期大学にて開講された。本論文では文京学院大学外国語学部におけるCALL教育および本科目の目的と狙いについて概観し、主に2012年度前期に外国語学部にて開講された科目「e-ラーニング応用 a」受講者のTOEICの伸びなどの学習データについて分析を行い、比較検討を行った。本学英語スキル科目の特徴である少人数クラス編成、ネイティブスピーカーの授業の多さに加えて、「三ラウンド・システム」にもとづくCALL教材を授業形式で履修することで英語力がより向上する可能性が高いことがわかった。

1. はじめに

本学外国語学部では、「国際的に通用する英語の実践的コミュニケーション能力」の養成を目指し、学部創設当初から「三ラウンド・システム」(竹蓋・水光, 2005)に基づいたCALL (Computer Assisted Language Learning) 教材を使用した指導を行なっている。導入形態は年度によって異なり、準備期間の2001年度(竹蓋・竹蓋, 2002)、「三ラウンド・システム」の理論開発者による実験的指導を実践した2002年度～2004年度(竹蓋・草ヶ谷・与那覇, 2004; 竹蓋・与那覇・竹蓋, 2006)、一部の必修英語科目で自習を勧めた2005～2007年度、主に希望者のみが文京語学教育研究センター(BLEC)のサポートの下、自習で使用した2008～2011年度の大きく4期間に分けられる。厳密な効果検証が難しい時期もあるが、実験的指導の高い効果(竹蓋他, 2004)に加え、本学在学中に比較的高い英語力を付けることに成功しTOEIC 800点以上のスコアに到達した学生の81%(2001～2011年度)が「三ラウンド・システム」に基づく聴解力養成用CALL教材であるListen to Me! シリーズ(LTM-CALL)を使用していた記録がある

* 助教/英語教育

こと、これらの学生による英語学習体験記で上記CALL教材を使用したことに関する具体的な記述が多く見られること（竹蓋・与那覇, 2009; 牛江・与那覇・フェアバンクス, 2010）などから、本学の英語教育に一定の貢献をしてきたと考えられる。

LTM-CALLは、十数年間に渡り開発が継続されており幅広い英語習熟度レベルや様々な興味を持つ学習者に対応できる数の教材が揃っているだけでなく、オンラインでアクセスすることが可能となっている（高橋, 2010）。本学でも、千葉大学言語教育センターと本学情報教育研究センターの協力の下、2010年度後期にオンラインで学内外からアクセスすることが可能となり、2012年9月現在13種類の聴解力養成用教材に加え11種類の語彙力養成用教材が使用可能となっている。まさに、インターネットにつながったパソコンがあればどこからでも自由に学習できる環境が整ったと言えるだろう。

しかし、当然のことながら、教材が自由に使える環境があることは、CALLの成功にとって必要条件ではあっても十分条件ではない。そこで我々は、オンラインでアクセス可能ではあったが対面指導が行われなかった2011年度と、正規の授業で対面指導を行なった2012年度前期の指導実践結果を報告することで、学部の英語教育においてCALLが効果を挙げるために必要な諸条件に関する情報を提供したいと考えた。

2. 指導の概要と結果

2.1. 2011年度のCALL自習環境と結果

新入生（2011年度入学生）が、LTM-CALLの使用を開始できるよう、年度始めに説明会を計5回実施し、新入生の約6割が参加した。さらに、BLECを平日午後開室し、教材の使用法の説明、技術的な問題への対処、英語学習に関する相談などのサポートを行った。ただし、教員から積極的に個々の学生に自習を促す指導や進捗確認は行わなかった。

上記の環境下で、どのくらいの学生が自習を継続できたのか、また自習を行った学生とそうでない学生ではTOEICスコアの変化に違いがあるのかについて調査した結果を以下に記す。外国語学部2011年度入学生について、(1) TOEIC-IP（入学時スコアと1年終了次に到達したTotalスコア）と(2) 英語学習アンケート（2011年12月に1年次学生を対象とし、1年生全員の必修授業である「大学入門・活用法」の後期最終授業日に実施）の2点のデータを分析した。アンケートの回答サンプル数は191件であった。その結果、Listen to Me! シリーズのうち、少なくとも1種を「最後まで丁寧使用了」と回答した者は191名中14名（7%）であった。その学習を完了した14名と上記アンケートで教材の使用報告がなかった85名のTOEIC Totalスコアを比較した結果が以下の通りである（表1）：

表 1: LTM-CALL 自習群と未使用群の TOEIC 平均スコア

	人数	入学時スコア	1 年終了次到達スコア	上昇スコア
LTM-CALL 自習群	14	335	465	130
LTM-CALL 未使用群	85	338	421	83

2群の TOEIC 上昇スコアについて *t* 検定を行った結果、統計的有意差 ($t(97) = 2.95$, $p = .004$) が確認された。つまり LTM-CALL を自律的に学習ができれば、学習していない群に比べて TOEIC 上昇スコアが有意に大きくなるということになる。

一方、完遂率 7% という数字は残りの 93% の学生にとって、完全な自律学習は難しかったことを物語っている。ただし、この低い値は、本学の学生特有の現象とは言えない。片桐 (2006) は、e-Learning 教材を導入し全学生が使用可能な環境を整えても自主的に学習した学生の割合はわずか 0.8% であったと報告している。このことは、少なくとも初期段階では、教員による動機付けやテストによる強化を提供できる「授業」が重要であることを意味していると考えられる。

2.2. 外国語学部・短期大学選択科目「e-ラーニング応用 a, b」導入経緯

2012年度より、「e-ラーニング応用 a, b」が外国語学部・短期大学の選択科目として開講されることになった。当該授業の目的は、第一に CALL 教材を使用した効率のよい学習を行うことで主に英語の受信力を高めること、第二に、受講終了後も自ら学習を継続するための自律学習力を育てることであった。

「e-ラーニング応用 a, b」は短期大学必修科目「e-ラーニング」(2012年度のカリキュラムの「e-ラーニング基礎」) および短期大学選択科目「CALL I, II」が前身となっている。短大必修科目「e-ラーニング」は英語聴解力を強化する LTM-CALL、および語彙力養成教材の「TOEIC Vocabulary」を中心に学習を行う科目として開講されている。英語コミュニケーション科目のカリキュラム編成としては、短期大学および外国語学部 1・2 年時において、e-ラーニングのみが異なるカリキュラムと言える(表 2-a, b)。外国語学部のカリキュラムにおいて、英語聴解力の養成は Communicative English I, II という会話中心の科目の中で副次的にその向上を目指している。しかし、聴解力が一定のレベルに達していない学生にとっては、英語のネイティブスピーカーである教員が話す英語の大部分が理解可能なインプット (Krashen & Terrell, 1983) にならず、非効率な場合があることも否めない。英語受信力が不足している学習者にとっては聴解力養成に焦点を当てた指導も必要であり、LTM-CALL を使用し、学内外で英語聴解力を高めることができる科目として「e-ラーニング応用 a, b」は補完的役割を担う。

表 2-a : 本学外国語学部 必修英語科目

1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
Communicative English I	Communicative English II	Oral Communication I	Oral Communications II
Writing I		Content-based English	英語資格講座
Integrated Skills I	Integrated Skills II	Writing III	
Reading I	Reading II		

表 2-b : 本学短期大学 必修英語科目

1 年次	2 年次
Listening & Speaking I	Listening & Speaking II
Writing I	Writing II
Communicative Grammar I	Communicative Grammar II
Reading I	Reading II
e-ラーニング	英語資格講座

以上のような背景および必要性から「e-ラーニング応用 a, b」が開講されることとなった。次項では前期開講の「e-ラーニング応用 a」の学習効果を分析する。

2. 3. 2012 年度前期 「e-ラーニング応用 a」指導概要と結果

2.3.1. 指導の概要

「e-ラーニング応用 a」は文京学院大学 外国語学部 1年生を対象とした選択科目であった。火曜日4限と金曜日4限の2クラスが開講され、本稿の著者2名がそれぞれのクラスを担当した。どちらも今年度から刷新されたCALL教室にて行われ、教室の最大席数である40名(2クラス合計で80名)が履修した。履修を希望したにも関わらず、定員を超えていたため履修ができなかった学生は、後期に優先的に履修を認めることとした。内容はLTM-CALL(難易度と内容については付録1を参照)と、同じく「三ラウンド・システム」にもとづく英語語彙教材「TOEIC Vocabulary (Reading1)」、各教員が用意したTOEIC対策のプリント、速読練習のプリントを使用した。両クラスは同じシラバスで行われ、LTM-CALLの進度、テストスケジュール、各教材のテスト、期末テストの問題は共通のものを使用した。本授業の成績評価および学習スケジュールは以下の通りであった。

- (1) 期末テスト (TOEIC 形式) =10% (クラス内期末 5%, 学内 TOEIC IP テスト 5%)
 (2) Listen to Me! の Unit テスト (計 5 回) =30%
 (3) 語彙教材 TOEIC Vocabulary (Reading) テスト =30%
 (4) LTM の総学習時間 (15 時間を要求) =10% + 超過分は5%を上限に加算
 (5) 平常点 =20%

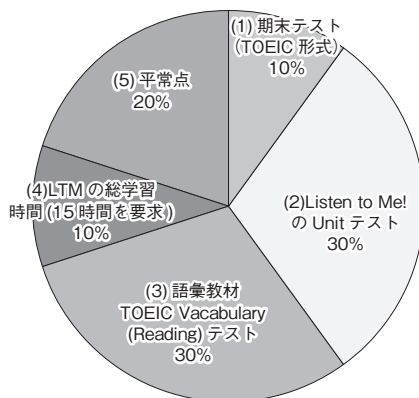


図 1：成績評価の割合

表 3：学習スケジュール

週	LTM-CALL 学習範囲	テスト予定	
		TOEIC Vocabulary	LTM-CALL
第 1 週	オリエンテーション		
第 2 週	Unit 1 Step1, 2 の途中	Set1&2 1 回目	
第 3 週	Unit 1 Step2, 3	Set3&4 1 回目	Unit 1
第 4 週	Unit 2 Step1, 2 の途中	Set5&6 1 回目	
第 5 週	Unit 2 Step2, 3	Set1&2 2 回目	Unit 2
第 6 週	Unit 3 Step1	Set3&4 2 回目	
第 7 週	Unit 3 Step2	Set5&6 2 回目	
第 8 週	Unit 3 Step3	Set7&8 1 回目	Unit 3
第 9 週	Unit 4 Step1	Set9&10 1 回目	
第 10 週	Unit 4 Step2	Set7&8 2 回目	
第 11 週	Unit 4 Step3	Set9&10 2 回目	Unit 4
第 12 週	Unit 5 Step1 / 次の教材 Unit 1 Step1 ^{*1}	Set1 ~ 5 3 回目	
第 13 週	Unit 5 Step2 / 次の教材 Unit 1 Step2	Set6 ~ 10 3 回目	
第 14 週	Unit 5 Step3 / 次の教材 Unit 1 Step3		Unit 5 / Unit 1
第 15 週	授業内 期末試験 (TOEIC 形式：Listening Part のみ)		
前期終了時	学内 TOEIC IP テスト (Listening & Reading すべて)		

*1 Listen to Me! シリーズは教材によって Unit4 までの構成のものがあり、その場合は次の教材の Unit1 を学習した。

LTM-CALLとTOEIC Vocabularyの学習は期日までに授業外で学習することが課せられ、学習履歴は各学習者のUSBメモリに保存されたものを約3週毎に定期的に回収した。LTM-CALLは各学習者の習熟度に合った教材を選択し(付録1参照)、担当教員は各学生の選択教材の難易度適性について適宜指示を行った。教材はオンラインで提供され、学内外を問わずインターネット環境があればどこからでも学習可能であった。

1コマの授業は、語彙教材TOEIC Vocabularyのテスト、学習動機付けを全体で行い、各学習者の進捗チェックを兼ねてLTM-CALLによる学習を15～25分程度実施し、必要に応じて教員による個別指導ができる環境を提供した。LTM-CALLのテストが予定されている週はテストを実施し、残り時間(15～30分程度)で問題演習をグループワークで行った。LTM-CALLのUnitテストはパスワードが掛けられたホームページ上で授業中に担当教員の監督のもと受験し、内容は教材内で使われたWords & Phrasesに関するもの、教材内の音声の一部を聞いて内容に関する質問に答えるもの、文章の並べ替え問題、英文の空所補充で構成され、おおよそ20分程度かかるテストであった(付録2参照)。授業内期末試験は授業時間の制約上TOEIC公式問題集のListeningパートのみ(全100問)を使用した。

2.3.2. 受講者と分析対象者

受講者は、文京学院大学 外国語学部1年生80名(40人×2クラスの合計)で、習熟度別に分けられることなく、様々なレベルの学習者が各クラスに混在した。受講者の習熟度は入学時のTOEIC IPの結果からTOEIC 170～500点、習熟度の平均点は319.6点($N=80$, $SD=75.8$ 点)であった。

本研究では、2012年4月入学時の学内TOEIC IPの得点を学習前の習熟度(Pre-test)とし、前期終了時の学内TOEIC IP(Post-test)(2012年7月31日)のスコアとの差から、習熟度の伸びを分析した。それらについて受講者と非受講者とで比較を行うことにした。そこでまず、Post-testを受けていない者(8名)は分析の対象から外した。また、LTM-CALLの5つのユニットを学習するスケジュール(総学習時間は最低15時間を要求)の中で総学習時間が4時間未満の学習者(テスト未受験者とは別の8名)は、本授業の学習効果を観察する対象としてはふさわしくないため、分析対象から除外した。分析対象は授業履修登録者80名からこれらの16名を除外した64名であった。以下「受講者」とは、「e-ラーニング応用 a」の内容を完遂した学習者という意味で、この分析対象の64名を示すこととする。

2.3.3. 指導結果1：教材学習量と学習結果

受講者64名の総学習時間の中央値(外れ値を考慮し平均値は用いないこととした)は13時間16分、Unit終了時に行ったUnitテストの合計(100点×5回)の平均点は338点でこれは正答率約68%に当たる($N=64$, $SD=66.2$ 点, 範囲=205点～450点)。TOEIC Vocabularyのテスト

（全12回、100点満点、合計1200点満点）の合計の平均点は956.8点でこちらは正答率約80%であった（ $N = 64$, $SD = 169.3$ 点、範囲 = 526～1188点）。どちらも一学期間を通しての合計点であることを考慮すれば及第点と言える。LTM-CALLのUnitテストは、十分に学習していなければ正答することが難しい問題であるため、68%という正答率は概ね学習者は学習を適切に行っていたことを示していると考えられる。

2.3.4. 指導結果2：TOEIC スコア

「e-ラーニング応用 a」を受講しており分析対象となっている上述の受講者64名と非受講者（当該科目を受講していない外国語学部1年生で入学時および期末の学内TOEICを受験した全学生130名：本論文で分析対象とならなかった16名は除く）の1学期間のTOEICの伸びについて分析および考察する。非学習者の前期開始時（入学時のTOEIC IP）のTOTAL得点の平均点は316.5点（ $N=130$, $SD=104.0$ 点）で受講者とほぼ同等の習熟度であったが、前期終了時（学期末の学内TOEIC）では351.7点（ $N=130$, $SD=102.7$ 点）で35.2点の伸びであった。受講者のTOEICの平均点は学習開始時（入学時のTOEIC）318.5点（ $N=64$, $SD=75.8$ 点）であったが、学習終了時（学期末の学内TOEIC）は391.2点（ $N=64$, $SD=85.6$ 点）と72.7点の伸びがみられた（表4）。

表4: 「e-ラーニング応用 a」受講者と非受講者の TOEIC の平均点と伸び

		学習開始時		学習終了時	伸び（開始時 - 終了時）(点)
受講者 (64名)	TOEIC (TOTAL)	318.5	→	391.2	+72.7
	<i>SD</i>	(75.8)		(85.6)	
	TOEIC (Listening)	201.6	→	241.6	+40.1
	<i>SD</i>	(50.0)		(53.7)	
	TOEIC (Reading)	117.0	→	149.5	+32.6
	<i>SD</i>	(35.5)		(44.0)	
非受講者 (130名)	TOEIC (TOTAL)	316.5	→	351.7	+35.2
	<i>SD</i>	(104.0)		(102.7)	
	TOEIC (Listening)	198.4	→	218.7	+20.2
	<i>SD</i>	(63.8)		(60.4)	
	TOEIC (Reading)	118.1	→	133.0	+14.9
	<i>SD</i>	(49.3)		(49.7)	

表4から、受講者は非受講者に比べてTOEIC (TOTAL得点) に2倍強の伸びがあったことがわかる。受講者と非受講者のTOEIC (TOTAL得点) について t 検定の結果、0.1%水準で有意差が見られた ($t(192) = 3.89$, $p < .001$)。受講者と非受講者は「e-ラーニング応用 a」以外の必修英語コミュニケーション科目として同じ科目を受講している。他の選択科目である「TOEIC・英検入門／初級／中級」や「Business English」といった選択の英語関連科目を同時に履修して

いた者が含まれたデータであるため、すべてが「e-ラーニング応用 a」の学習効果であると言うことはできない。しかし、上述の「e-ラーニング応用 a」以外の選択英語関連科目を履修している者の割合は受講者においても非受講者においても同程度の割合で存在すると考えられるため、結果を大きく左右する要因とは考えにくい。したがって、「e-ラーニング応用 a」を受講したことが、ある程度は英語受信力を伸ばすことに寄与したと言えるだろう。

2.3.5. 指導結果3：アンケートによる主観的評価

「e-ラーニング応用 a」では、全授業で実施されている「授業アンケート」とは別に、学期の最後に独自のアンケートを実施し、LTM-CALLと授業全般に対する印象評価のデータを収集した。なお、アンケートの結果が成績等に影響しないこと、今後の授業改善のために役立つ目的で実施することを説明し、実施した。

まず、LTM-CALLに対する印象評価の調査は、5段階のEqual Appearing Intervalsの手法を用いて行なった。有効回答数は70件であった。5段階の4、5(肯定的)と3(中立)、1、2(否定的)に回答した者の割合を、表5に示す。

表5: LTM-CALL に対する 印象評価

	肯定的	中立	否定的
1) 内容、トピックに興味を持った	86%	11%	3%
2) 難易度は適切であった	77%	14%	9%
3) Step 1、2、3 と進むにつれ聞けるようになった	86%	7%	7%
4) Listen to Me! を使用し、聞き取りの力がついた	76%	16%	9%
5) Listen to Me! の学習は楽しかった	79%	14%	7%
6) 別の Listen to Me! 教材も学習したい	90%	6%	4%

学習者は、本学で利用可能なListen to Me! シリーズ約13種の中から、自身の英語習熟度レベルと興味に合わせた教材を自ら選んで使用した。その結果「内容、トピックに興味を持った」という項目には、肯定的回答が86%と比較的高かったのに対し、難易度に関しては肯定的回答が77%とやや劣る値となった。このことから、学習者が教材を選ぶプロセスに改善の余地がある可能性がある。まず、教材名、TOEICスコアによる教材の難易度レベル、教材の内容とトピックを記した一覧を提示したのだが、指導者が「第一に難易度レベルのあったものを選ぶように」と指示したのにも関わらず、興味のあるトピックを優先して選んだため、難易度が合わなかった可能性がある。さらに、学習者が1年次学生であったため、TOEICスコアが英語習熟度レベルを正確に反映していなかった可能性も考えられる。2011年度末に実施したアンケートによると、入学後に初めてTOEICを受験するという学生が大半であった。初めて受けるテストの場合、形式に慣れていないためスコアが低めに出る傾向があるが、そのスコアを参考に教材を選んだために、自身の英語力と合っていない教材を使用した可能性も考えられる。

ただし、この結果については、さらにデータ収集した上で、今後より詳細な分析を行う必要がある。教材のレベルと学習者の英語習熟度レベルがTOEICで100点ずれた場合、学習効果がほぼ半減してしまうことが報告されており（土肥・竹蓋・竹蓋, 2001）、リストから学習者自身が教材を選定するよりも、比較的短時間で最適な教材を選定できるシステムの開発が必要であろう。

表5の項目3)と4)は成就感を問う項目である。「Step 1、2、3と進むにつれ聞けるようになった」と、教材の内容自体が理解できるようになったと感じた学習者が86%と多く、「三ラウンド・システム」に基づいたきめ細かな学習サポート情報と段階的な学習が支持されたと言ってよいだろう。「Listen to Me!」を使用し、聞き取りの力がついた」に肯定的回答をしたのは76%であったが、わずか3ヶ月半の学習で76%の学習者が応用力の向上を感じたことは、TOEICのスコア上昇と学習者の成就感が、ある程度対応していたことを意味していると考えられる。

表5の項目5)は満足感を、項目6)は継続学習意欲を問う項目であるが、授業の課題として使用した教材の学習に対して8割近くの学習者が「楽しい」と感じたこと、また9割の学習者が学習継続を希望したことから、「e-ラーニング応用 a」受講者のLTM-CALLに対する評価は総じて高かったと言えるだろう。

次に、「e-ラーニング応用 a」授業全般に関する印象評価の結果を示す。

表6: 「e-ラーニング応用 a」に対する印象評価

	肯定	中立	否定
1) LTM 以外の授業内学習 (TOEIC 対策等) は不要だ	8%	32%	60%
2) 対面授業無しでテストだけで単位が出る形式がよい	14%	26%	60%
3) 毎週授業があるから LTM や Tvoca を学習した	66%	23%	11%
4) 後期の「e-ラーニング応用 -b」も今後履修したい	78%	14%	8%
5) 人数制限で取れない可能性があるのは不満だ	75%	17%	8%
6) この授業全体を通して英語力が向上したと思う	85%	14%	2%
7) 授業が無くても LTM の学習を継続したい	89%	8%	3%
8) この授業を取って良かった	88%	8%	5%

項目1)、2)、3)は対面授業とCALL教材による個別学習に関する質問である。当該授業ではLTM-CALLとTOEIC VocabularyというCALL教材による学習だけではなく、問題演習や速読練習も行なった。CALL教材による個別学習のみではなく、グループワークを取り入れた学習や演習を実施したことが6割の学生に支持されたことが1)の結果からわかる。また、対面授業を行わずCALL教材による個別学習とその結果確認のみで単位が認められる授業を望む学習者はわずか14%で、6割の受講生が否定的であったことが2)の結果から読み取れる。さらに、「毎週授業があるから」CALL教材による学習を継続できたと感じている学習者が66%いたことが3)の結果からわかり、多くの受講生にとって授業による強化や動機付けが重要で

あったことが推定される。表6の項目4)、5)、6)、7)、8)は本授業全体に対する評価である。6)の結果から85%の受講者が成就感を、7)から89%がLTM-CALLによる学習継続意欲を、8)から88%が満足感を感じたことがわかる。また、それぞれの項目への否定的回答は2%、3%、5%と少なかったことから、授業に対する全体的な評価は総じて高かったと言える。特に、受講終了後に授業がなくてもCALL教材による学習を継続したいと希望する受講者が多かったことは、本授業の目的のひとつである「自律学習力を育てる」ことに寄与できた可能性を示していると考えられる。ただし、実際にどの程度の受講生が学習を継続できるかについては、今後の検証が必要である。

次に、アンケートの最後に、「授業改善のために自由にコメントを書いてください」として設けた自由筆記部分に書かれた意見をいくつか引用する。

自分でもおどろくほど授業に対してのやる気を持つことができた。後期も履修したい。みんなにすすめられる授業のひとつです。

LTMはUnitを進めていくと、英文がどんどんきやすくなっていったし、Vocaもやればやる程、頭に長く記憶されていったので、とてもやりがいがあった。

街を歩いているだけでも、外人の方が何をしゃべっているか理解できるようになったり、毎日がとても楽しくなりました。

だいたい教科より、宿題量や勉強量が激しかった。

予習が辛かった。テストの量が多いときは特に辛かった。

約3ヶ月半という短い期間で、教材の内容がわかるようになっただけではなく、街で耳に入る英語が理解できる応用力がついたのは、妥当性の高い理論に基づく教材による学習に真剣に取り組んだ結果であろう。否定的な意見の中には、課題が多いことを指摘するものが少なくなかったが、裏返せば大学の「単位の実質化」が求められる今、学習時間確保のための手段のひとつとしてもCALL教材が有効に活用できることを意味していると言える。

3. まとめと今後の展望

本実践により、授業なしでLTM-CALLによる学習を完遂できた外国語学部1年生は全体の7%であったこと、同教材を使用した対面授業を実施した結果、非受講者と比べてTOEICスコアの伸びが約2倍であったこと、受講生の多くが教材に対して、また授業に対して、肯定的な

評価をしたことがわかった。

コンピュータを使用して言語を学ぶCALLはe-ラーニングの一形態と捉えることができる。対面型授業とeラーニングの連携については、e-ラーニング開発が始まった2000年代初めから言われている。Rosenberg (2001) は「e-ラーニングは講義と平行して用いることで最もその効果を発揮する」、Masie (2002) は「対面授業形式とオンライン形式を組み合わせた教育方法でそれぞれの長所を組み合わせることができる。」と述べている。つまり、完全自習型の形式ではeラーニングの真価を発揮することが難しいのである。

eラーニングとその他の対面型授業との関係も重要である。京都大学で、主に自律学習により単位を与える形式で、LTM-CALLを使った指導を1000人規模で実施した例について、竹蓋・水光 (2005) は「CALLを導入しさえすればよいわけではない（中略）自立型CALLと対面型授業の連携を保つことが重要」と述べている。つまり、eラーニングは対面授業との連携を考慮したカリキュラムの中で、システムとして機能するように導入すべきだということである。CALLは他の授業が不要になるような夢の学習法ではなく、カリキュラムと生身の教員が、生身の学生に向けて提供できる一つの学習環境である。カリキュラムにおいて、e-ラーニングの授業は他の授業を廃する排他的なものではなく補完的な意味で連携するべきものであると我々は考える。

引用文献

- Krashen, Stephen D. and Tracy D. Terrell. (1983). *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Hayward, CA: Alemay Press.
- Masie, E. (2002). "Blended learning: the magic is in the mix". In A. Rossett (Ed.), *The ASTD e-learning handbook*. New York: McGraw-Hill.
- Rosenberg, M. J. (2001). *E-Learning: strategies for delivering knowledge in the digital age*. New York, NY: McGraw-Hill.
- 牛江ゆき子, 与那覇信恵, フェアバンクス香織 (2010) 『文京学院でかなえた夢－先輩たちの英語学習体験記』文京学院大学 文京学院短期大学 東京
- 片桐一彦 (2006) 「正規授業科目としての英語 CAI の教育効果の検証: TOEIC IP で何点伸びるか」『関東甲信越英語教育学会 研究紀要』 pp.89-100.
- 高橋秀夫 (2010) 『統合型英語 Online CALL システム－社会のニーズに応える英語コミュニケーション能力を養成するための英語 Web CALL システムの開発－平成19年度～平成21年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム大学改革推進等補助金 (大学改革推進事業) 研究成果報告書』千葉大学
- 竹蓋幸生, 水光雅則 (2005) 『これからの大学英語教育』岩波書店
- 竹蓋幸生, 竹蓋順子 (2002) 「新しい英語教育『三ラウンド・システム』」『文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学紀要』創刊号 pp.1-14.
- 竹蓋幸生, 草ヶ谷 (竹蓋) 順子, 与那覇信恵 (2004) 「外国語学部における英語教育改善の歩み (2)」『文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学紀要』第3号 pp.1-15.

竹蓋幸生, 与那覇信恵, 竹蓋順子 (2006) 『文京語学教育研究センター活動報告 (2001 ~ 2004 年度)』

文京語学教育研究センター

竹蓋幸生, 与那覇信恵 (2006) 「仕事で使える英語力の養成を目指すカリキュラムの編成に関する研究」

『文京学院大学総合研究所紀要』第 号 文京学院大学総合研究所 pp. 3-29.

竹蓋幸生, 与那覇信恵 (2009) 『文京語学教育センター活動報告 (2008 年度)』文京学院大学 文京語

学教育研究センター 東京

土肥充, 竹蓋幸生, 竹蓋順子 (2001) 「三ラウンド・システムに基づいた CALL 教材の開発とその試用」

『日本教育工学会 第 17 回全国大会』鹿児島大学

(2012.10.1 受稿, 2012.11.27 受理)

付録 1 : 受講生に提示した Listen to Me! シリーズのリストおよび対象学習者の目安

教材名 (略称)	レベル*	内容
English One (EO)	150 - 320	学校、家庭、職場など、日常生活の様々な場面での行なわれる短くてシンプルな対話から、英語リスニングの基礎を学べる。
First Step Abroad (FS)	250 - 380	語学研修や海外旅行で英語が必要になる場面を想定した「英語アナウンス」や「日常会話」など身近なトピック
First Listening (FL)	380 - 450	日常会話、アナウンス、ユーモア、スピーチ、ニュースなどすぐに役立つ幅広いトピック
New York Live (NY)	450 - 520	世界経済、金融、ビジネスの中心、そして文化、芸術、情報の発信地であるニューヨークの都市生活を紹介
American Daily Life (DL)	450 - 520	日本では触れる機会の少ない、米国郊外の衣食住関連の日常生活や文化を紹介
Introduction to College Life (IC)	520 - 590	The Times 紙により世界第2位にランクされたカリフォルニア大学バークレー校の教授、職員、学生に対するインタビュー (入門編)
People at Work (PW)	520 - 590	店長、医師、弁護士等に対するインタビューを通して、アメリカで働く人々の仕事と生活を紹介
Canadian Ways (CW)	520 - 590	カナダのアルバータ州で行われたインタビューをもとに開発された教材。カナダのユニークな文化とカナディアンロッキーの美しい自然を楽しむながら学習できる。
College Life (CL)	590 - 660	The Times 紙により世界第2位にランクされたカリフォルニア大学バークレー校の教授、職員、学生に対するインタビュー
Gateway to Australia (AU)	590 - 660	オーストラリアのメルボルンで行われたインタビューをもとに開発された教材。オーストラリアの文化、習慣、歴史を楽しむながら英語を学習できる。
A Bit of Britain (BB)	590 - 660	ロンドンやイギリス南西部で行われたインタビューをもとに開発された教材。イギリスの歴史、伝統、文化も学習できる。
College Life II (CT)	630 - 730	The Times 紙により世界第2位にランクされたカリフォルニア大学バークレー校の教授、職員、学生に対するインタビュー (発展編)
AFP News from the World (NW)	730 以上	世界各国からのニュース報道～学ぶ上級用教材

*「レベル」は、想定される学習前の TOEIC スコア

付録 2：Listen to Me! シリーズの Unit テストの画面キャプチャ

